

**大蔵地区フィールドワーク
撮影成果報告**

神戸学院大学人文学部人文学科 基礎演習

1年次後期矢嶋ゼミ

2017年11月12日実施

神戸学院大学地域研究センター

はじめに

神戸学院大学地域研究センターにおいて、2011～13年度にかけて行なわれた文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業による「明石大蔵町を中心とした地元との共同作業による町の文化資源の再発見と活用、および未来への継承プロジェクト」研究では、学生が地域の人々のさまざまな営みを撮影することを念頭において、2011年度に一眼レフカメラを購入した。

これ以降、1年次後期（第2セメスター）の矢嶋ゼミでは、学生が明石市大蔵地域において写真撮影を行ない、撮影結果を活かした成果を公開する取り組みを行ってきた。また、2年次以上のゼミにおいても、学生が一眼レフカメラを使用して、大蔵地域で行なわれる祭礼や日常の景観を撮記録影してきた

2017年度の1年次後期矢嶋ゼミ（人文学部基礎演習）では、2017年11月12日に、宿場町であり漁村でもあった大蔵地域を歩き回り、環境と営みの歴史を学び、撮影するフィールドワークを行なった。街並みや海岸、地域猫など、課されたいくつかのテーマに基づいて学生が撮影し、作品化した。このたび、2018年度の地域研究センター明石グループにおいて、大蔵地域において記憶継承の拠点を構築する研究を行なうこととなったことから、この授業の課題として学生たちが提出した写真と解説文からなる作品をまとめ、大蔵地域の記録として示そうというのが、このPDF形式の報告刊行の意図である。

以下においては、学生たちが、自らが撮った写真を自分なりの言葉で解説している。それらは、まさに撮りたいと思った大蔵地域の景色を、そのときの光と言葉によって記録したものである。学生たちは、大蔵地域の方々にとって通りすがりである。だが、通りすがりだからこそ気づくこともある。そう思って頂いて、学生たちが残した記憶をご覧いただきたく願う次第である。

2018年3月20日

矢嶋 巖
神戸学院大学人文学部准教授



浦上 健

「船を待つもの」

帰ってくる船を待つ人間のように鳥が目線を向けている。嬉しいはずなのに、どこか寂しい。一人でいるのが楽しかったのだろうか。それとも、帰ってくる船に何か伝えなければならぬことがあるのか。

少し遠くから撮って、鳥と船を主役にするのもよかった。



浦上 健
「松蔭の館」

松の木の奥に佇む一つの館。かつての役割からいまの役割へ。昔からこの土地を見守ってきた松と共に、現在へとつながる道標となる。まるで隠れ里のように静寂としつつも、何かこの土地からのパワーも感じられる。

空をもうちょっと背景として写せば、広い空間にできたと思う。



大岡俊輝
「猫の休暇」

これは、猫が車の下でどこかを見て休んでいる様子である。人や車がたくさん通る場所にも関わらずかなりリラックスして時間を過ごしていることがわかる。

反省点は、猫の表情が暗かったので、もう少し明るい表情を撮れると良いと感じた。



大岡俊輝

「風情のある建物と木」

これは、古い建物を階段の下から撮ったものである。こうすることにより風情のある写真を撮ることができた。建物を撮るだけでなく植物を写真の中に入れることにより建物だけでは感じることはできない素晴らしい雰囲気を出すことができると感じた。

反省点は、右にある木の上の部分がか切れているので全体が写るように撮れば良かった。



柏原和輝
「ヒカリ」

ニュースでは見ていたけれど、目の前にすると想像を超えていて、言葉が詰まってしまった。火災の前に実際現場を見ていたので、驚きは隠すことができず、同時に静けさとあまりのはかなさに恐怖をおぼえた。

しかし、今でも変わらず太陽の光は大蔵市場を照らしていて、雲はさわやかな海風に乗って流れている。この写真の雲も動いているような錯覚を受ける。陰と陽が印象的に写せたと思う。

暗い印象だけを与えないように撮ったが、逆に大蔵市場の現状をしっかりと収められていないので、もう少しだけ引きで撮ったほうがよかったように思う。



柏原和輝

「つながり」

2人の距離感や空間に信頼や安心を感じる。海での写真だけれど肌寒さを感じない写真となった。互いに違うところを見ていても、何か二人をつなぐものがある。

もう少し引きで撮って、足元を映して安定感が必要に思う。足元をわざと少し入れずに遠近感を出してもよかった。中途半端になってしまったように感じる。



川原大輝

「区切られた世界」

まるで世界がそこだけ区切られてしまった箱庭の中で一人。足を濡らして、囲まれた世界から覗く外の世界を羨むような、寂寥感に満ちた姿がそこにあった。

全体のコントラストとして、空の青色がもうちょっと強調できればよかったと思う。でもまあ急に振り向いて撮ったのでその前に調整するのも難しかったという言い訳。



川原大輝

「空を望む」

モニュメントとして佇むばかり、見上げている空に想いを馳せる。飛び立つことのないその翼を広げて、青に映えるその天頂に見るものは何なのだろうか。

海のカテゴリーなのに、全体的に空をメインにして撮っている写真であること。でも個人的にすごくお気に入り、この写真だけは絶対入れようと思った結果、強引にねじ込んでしまった。



菊池航奨

「希望の緑」

これは大蔵市場の向かいにある、大蔵会館の二階から撮らせてもらったものである。管理にあたっている方は、会館の植物に燃え移らなくてよかったと語っていた。私はこの植物を希望の象徴として、このタイトルにした。また、左に写っている植物と撮り、あえて火事跡をぼかすことで、植物を強調しつつ、火事跡を表現することができたと思う。ちなみに左の植物の名前を知っている人がいたら教えてほしいです。



菊池航奨

「俺についてこい」

町にたまたまいた猫の写真である。猫が言ってそうな「俺についてこい」というセリフをタイトルにしたことで、先頭にたっていて、リーダーっぽくなったと思った。猫の写真を撮るのは楽しかったが、私は猫アレルギーで猫を触ることができないのが悔しいです。



佐々木大輔
「花と華」

花に焦点を当てその後ろにカメラを持った学生を写して、どちらも映えるようにしました。花びらに光が集中し白くなっているなので、光を抑えるため花びらにもっときちんと焦点を当て、光を抑えて撮るべきだったと思いました



佐々木大輔

「少しだけ温まりたい」

完全に体を出して温まるのではなく、直射日光を避けて体半分だけを出して日向ぼっこをしているところから、猫からすると今日は少し肌寒かったのかなと思いました。表情がはっきりわかるように、アップでもっと光が入るように撮るべきだったなと思いました。



讃岐龍一

「バイト犬」

帰り道のたばこ店で撮った写真です。犬が店員という珍しい光景を見つけたので、反射的に撮りました。生活感が出ていて、市街地の日常を表しているように思います。こんな犬がいると助かるだろうなーと思いました。時給がいくらなのか知りたいです。



讃岐龍一

「木漏れ日」

大蔵海岸の広場の松の木を見上げて撮りました。良い感じに光が当たり、とても綺麗に撮れました。もう少し日光がさしていれば、もっと良い写真が撮れたと思います。



高原侑紀

「この先には何がある」

明石の街中を散策しているときに見つけた横道で撮った写真です。

できるだけ下から撮ってみたもので、後ろがボケていることによって先が見えない感じが気に入っています。また、前は黒く後ろは明るくすることでコントラストをはっきりとさせました。

人物を写していないことで、少しさびしい写真になってしまったと感じました。また、よくあるような構図の写真ばかりになってしまったため、もう少し色んな角度から撮ってみればよかったと思っています。



高原侑紀

「過ぎ去りし時を求めて」

枯れはじめている花を見て、時間の流れを感じて撮ってしまった写真です。

元々はカラーの写真でしたが、感覚的にモノクロのほうがいいなという理由で編集しました。実際、モノクロに編集したことでカラーだったときよりも時間というものを印象付けられたと感じています。また、この枯れはじめている感じが自分で気に入っています。



田路秋人
「儀式」

掬いあげては落とす。誰もがやったことのある他愛もない行動。それを鏡のように、或いは取り憑かれたように、腕を前に掲げて片手でカメラを支えているのも同じだ。それはまるで、儀式を執り行うように対になっている。

反省点は、後ろに先生が写って同士うちになったこと。



田路秋人

「抵抗するニャ」

いつもの場所に行くと、知らない人間がわんさかいた。お日様の光が気持ちいい日だった。駐車場でひなたぼっこをしたいのに、人間が邪魔で出来ない。けれども我慢だ。ここはしっかりと抵抗するニャ。

昼の十二時ごろ猫の目の瞳孔が細くなっていて此方を警戒して睨んでいるみたいに見え、そこから自分より大きな人間たちに何かしら抵抗しているように見えた。

反省点としては、猫の全体を入れるようにしたかった。



中島彩花

「海と木と人」

一見何の変哲もない写真かのように見えるが、海と木と人がバランスよく一緒に写る写真ってあんまりないかなと思い、選びました。シュールだけど、1つの作品になっているような気がします。

水平線が少しずれているので、カメラをまっすぐに構えて撮れば、更によくなると思った。



西山ひな

「あたしを撮りたいのかい？」

有名女優の猫様はちょっと遠目から

柵などを間に入れることによって少し距離感を作ろうという演出方法を考えてみた。
また、移動もせずただひたすら猫様がカメラ目線になるように待った。



西山ひな

「藍」

藍い世界に覆われた人と、物と、空間と、

寝転んで下から引きで撮る構図が大好きなので、それをつかって撮った写真。

海の中にいるかのように地上を切り取って、背景の空を大胆に、明石海峡大橋もちょびつと入れて、水平も大事に、と大切なことを詰め込んだ写真。



原 正悟

「海。彩る」

私は空の青さが好きです。抜けるような空の青さが雲の浮かぶようなふわふわとした気持ちにさせてくれます。ごつごつとした岩塊が空を引っ張るように海岸に横たわることで、現実を引き摺り下ろしているように捉えました。そして、それらは人工的に作られた景色です。海に対抗するために生まれた景観です。自然と人工との調和を表現したと思います。改善点は、光量が少なく全体的に暗くなってしまったので見づらくなりました。ですから、コントラストを明るくしました。



原 正悟
「いきづく」

今を生きる路地裏、青々とした草花に
脈々と受け継ぐ町、歴史と人の営みに
今昔で変わらぬ空、流転の大地と共に

反省点。空が青く太陽が温かく照らす。そのような安心感があれば、好印象を得られると思います。



平井菜々花
「宿場町の日常」

これは、大蔵市場の向かいにある、魚屋さん。周りの家は新築であったりする中で、少し古い雰囲気の漂うお店。扉を少しだけ入れることで、ふらっと扉越しに覗いているような感じを出してみた。もう少し、店主の手元がきれいに写せたらもっとよかったと思う。手前の扉が白とびしてしまった。



平井菜々花
「残すべき記憶」

これは、以前火災の起きた大蔵市場の写真。私は、初めて火災現場を実際に目にした
が、とても残酷なものだった。上から崩れ落ちているように見える木片などがその火災の
跡をより表している。残酷ではあるが、今写真に収めておかないと、ここの大蔵市場の歴
史も一緒に消えてしまうと思ったので写真を撮った。この市場が昔からあったというこ
とが伝わる、レトロな雰囲気のある窓と看板。もう少し、引きで撮って、店の側に写って
いる煉瓦も入れたら、昔の雰囲気が残せたと思う。



山本陽菜
「水鏡」

海の水が鏡の役割をはたして、水面に鮮やかな青い空と、白い雲が反射している。空が遠くの方まで広がっていて、それと平行して手前にある石がだんだんと遠のいて小さくなっていく様子から、空と海の広大さが分かる写真。



山本陽菜

「ゆっくりと流れる時間」

古風な建物と緑と光が共存している。

柔らかい日差しに包み込まれている空間。

木漏れ日が白や緑になって空間の中に溶け込んでいて、穏やかな気持ちになる写真。

反省点としては、主役を決めて撮れば良かった。



山本穂乃花

「大物を狙う」

大物を釣りたいと思うのは、釣り好きの男であるなら誰でも思うであろうこと。ただの趣味だと笑うなかれ。それは彼らにとってロマンである。

「今日こそあのフェリーぐらいの大物を釣り上げるぞ...！」

男性が釣りをしている先の延長線上に大型の船が横切っていくところが、男性が船を釣り上げているように見えたので撮った。逆光を利用してシルエットを作り、海を白っぽくすることで明暗をハッキリさせ、目の行き場が固定されやすくなった。改善点としては、男性がもっと踏ん張っているところであれば尚よかったと思う。



山本穂乃花

「日々の糧を求めて」

広い海原にぽつんと浮かぶ漁船。彼らの一番の楽しみな瞬間は魚のかかった網を引き上げて魚を得る瞬間。日々の生活のために、または家族のために、今日も網を引き上げる。

海に浮かぶ船の赤と、海と空の青、後ろの明石海峡大橋の白のバランスがいいと思ったので撮った。偶然入り込んだ漁師さんがいい感じに船のイメージを引き出してくれていると思う。後ろのほうをよく見ると水平線上の船がみんな同じ方向を向いていて、それがこの写真に横向きのラインを際出させるものになっている。



矢嶋 巖
「町の顔」

大蔵の男たちは年中忙しい。稲爪神社では、夏祭り、神輿が出る神幸行列や獅子舞、早口流し、八幡さんでは、布団太鼓が出る秋祭りに年明けの厄除け、天神さんでは春の人形祭りに夏の行灯祭り、さらにまちづくりの会では、スポーツフェスに、夏祭り、そして、去年から子どもキャンプが加わった。いつも同じような顔ぶれ。この日は消防団姿。まさに町の顔。

神戸学院大学地域研究センター

2017年度都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究

神戸学院大学人文学部人文学科基礎演習
大蔵地区フィールドワーク撮影成果報告
1年次後期矢嶋ゼミ

2017年11月12日実施

発行日： 2018年3月20日

編集者： 神戸学院大学地域研究センター

発行： 神戸学院大学地域研究センター

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518

TEL (078) 974-1551 (代)
